
月夜の魔法 — Cinderella the phantom thief —

佐和アルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜の魔法 — Cinderella the phantom thief —

【Nコード】

N2699V

【作者名】

佐和アルカ

【あらすじ】

夜の街を自在に駆け抜ける影一つ。その名も“怪盗シンデレラ”。ある月夜の晩、何もかもが謎に包まれている“彼女”に近づく影が……。

プロローグ

夜の街を自由自在に駆け抜ける影が一つ。

その名も“怪盗シンデレラ”。

数年ほど前からその存在は騒がれているが、実はまだその正体はよくわかっていない。

ただ一つ、女である、ということを除いて。

???

「ところで警部」

先ほどまで目を通していた手帳から視線を上げ、若い警部補は眉間に深いしわを刻んでいる上司に声をかけた。

「なんだ」

微動だにせず警部は聞き返す。視線は前方から僅かもずれない。その先にあるのは、簡素な台座に安置されたネックレス。大振りなブルーパールがこれでもかというほど連なっており、一見して高価な代物だとわかる。

「一体全体、どうして怪盗シンデレラが女だなんてわかったんです？」

初めて『彼女』が現れた時から今日まで、その姿を目にした者はいない。いつも、警備に当たった人間が目離れたその一瞬に、宝は跡形もなく消え去っているのだそうだ。

目撃した人間がいらないのにもかかわらず、どうして怪盗の性別が判明したのか。至極まっとうな警部補の質問に、警部は苦虫を噛み潰したような顔をして断言した。

「シンデレラといえば女だろう」

それを聞いた警部補はぽかんと一瞬呆気にとられたあと、盛大に吹き出した。

「なんすか、ソレ。めちゃくちゃテキトーじゃないですか」

「うるさい！ そろそろ静かにしろ。もうすぐ指定された時間だ」
警部補は自分の腕時計に目をやった。短針は十一と十二の間を指し、長針はその反対、五と六の間を彷徨っている。

予告状に書かれた時間は午後十一時半。その場の空気ががらりと変する。

総勢三十人でブルーパールの周りを取り囲み、約束の時を待つ。
警部を筆頭に今度こそはつかまえてやるという気迫がはくはくとしみ出ていた。

誰も何も喋らない。静寂だけがそこにあつた。
焦れた警部が腕時計に視線を移したときであつた。

——かたん
彼の後方からかすかな物音がした。静かな室内でそれは必要以上に大きく響く。

一斉に六十もの目がそちらへ向いた。

しかし、確かに音のした方向にはなんの影も見あたらない。

「いやいや皆さん、今夜もお勤めご苦労さまです！」

突然降ってきた高い声に、条件反射で警察たちは振り返る。

そして。

「……くそっ！」

そこにあつたのは、ブルーパールのネックレスのみ綺麗さっぱり消え去った台座であつた。そしてその代わりとばかりにガラスの靴の描かれたカードが一枚置かれている。

「またやられた……！」

般若の形相でじつと台座を睨みつけ、警部は素早く部下に指示を飛ばす。

「まだ屋敷内にいるかもしれん。すぐにあとを追って探し出せ……！」
バタバタと慌てて部屋から飛び出ていく警官たちを見送ると、警

部は再び台座を見遣り、苦々しく舌打ちをした。そんな警部に警部補はいつそ呑気に口を開く。

「まあまあ、警部。そんなに思い詰めてるとそのうち禿げますよ？」

「黙れ！ お前に言われたくない」

「……いや、俺もまだ禿げてません」

「人の揚げ足をとって楽しいか」

「いやいや。……でも、一つだけわかったことがあります」

「何！？」

急に神妙な声音になった警部補を、警部は片眉を跳ね上げながら振り返った。

そんな彼に、警部補はにやりと怪しい笑みを向ける。

「意外と声がかawaii」

しれっと言つてのけた警部補の脳天に、強烈な拳骨が炸裂した。

第一章 怪盗なんて（１）

「アメリカ〜！」

少し鼻にかかった声が聞こえたかと思うと、ガバツと後ろから首に抱きつかれた。

勢いに身体が前のめりになり、机との距離が縮まる。

フローラルな香りが鼻を突いた。

「おはよう、カティ」

「おはよ」

カティは弾んだ声で挨拶をして、長い金髪をゆらしながらアメリカから離れると、隣の席に腰を下ろした。それでやっと、彼女と視線が合う。

「どうしたの？」

首を傾けたアメリカにカティは待つてましたとばかりに身を乗り出しつつ話し出す。その目は幼い子供のようにキラキラと輝いている。

「それがね、昨日また出たのよ！」

「……お化け？」

とぼけてみせると彼女は齒がゆそうに地団駄を踏んだ。

「違うつて！ 怪盗シンデレラよ」

アメリカの肩がぴくりと小さくはねた。それには気付かぬ様子でカティは話を続ける。

「今度はあの大手お菓子会社の社長宅の家宝が盗まれたんだって」

「へえ。……というかカティ、その話好きね」

軽いため息とともに言うと、カティはきつめの目元をさらに吊り上げるようにして笑った。そうすると、彼女はまるで好奇心旺盛な猫のように見える。

「だって、面白いじゃない？ 女なのに怪盗やってて正体は謎に包まれてる。狙うのは宝石ばかりだけど、金持ちの家からしか奪わな

い。真夜中の十二時を過ぎて残されているのはガラスの靴だけ……
格好いいわ!」

恍惚と目を輝かせるカティ。アメリカは再びため息をついた。

「そのうちあなたの家にも現れるかもよ?」

「いいわね、それ。そしたらサインでももらおうかしら」

呆れた。こうなったらもう何を言っても聞かないだろう。

アメリカはなおも怪盗の話が続けるカティから視線を外し、周囲に目を向けた。上質な生地 of 制服に身を包んだ男女が、今のアメリカとカティのようにそれぞれ思い思いにグループを作り談笑を楽しんでいる。

私立テラスカルディア学園。金持ちの子息や息女が集う上級学校だ。

目の前で怪盗シンデレラについて熱弁をふるうカティも例に漏れず、貿易会社の社長令嬢である。

「それでねー、……て、聞いてる?」

不満そうにカティが言ったとき、教室がにわかになぜかざわついた。数名の女子が窓に張り付いて黄色い声をあげている。

「……なに?」

「ああ、学生会長ね」

眉を顰め、思案顔になったアメリカとは対照的に、カティはちらりと窓際を見遣っただけで断言した。

「学生会長がどうしたの?」

「外にいるんですよ。それを覗いて騒いでるのよ」

端的にカティは説明するが、さっぱり話が見えない。

アメリカは学生会長の姿を脳内に思い描こうとした。しかし、あいにくそれはぼんやりとしか浮かんでこない。

「学生会長って見てて楽しいの?」

真顔で尋ねると、カティは一瞬きょとんとしたあと盛大に吹き出した。

「会長がいい男だから騒いでるんですよ。……あんだ、本当にこの

手の話には弱いわね」

大仰に肩を竦めたカティにムツとして、アメリカは反論を試みる。
「うるさいわね。そういうことに興味ないだけよ」

「ふうん？　じゃあ、何になら興味があるって言うの？」

カティは何気なく言ったのだから、その言葉にアメリカはあからさまにうるたえた。

「と、特に興味のあるものは……今のところないけど……」

アメリカの声はだんだんとしぼんでいく。しかし、幸いなことに目の前のカティは不振なアメリカの態度など全く気にしてはいなかった。

「それじゃあ、試しに窓の外を覗いてきてみたら？　この機会に恋愛沙汰に興味を持てるようになるかもしれないし。あ、それとも怪盗シンデレラ様にしておく？」

「遠慮しておく」

目を輝かせて怪盗の魅力について語り出さんばかりのカティに、アメリカは即答した。

「怪盗になんて興味持てないし」

怪盗なんて（２）

「ほんつとくに、怪盗なんて興味ないんだけどね……」

細い路地を猫のような身のこなしで抜けながら、アメリカは嘆息した。

「はあ。カティが鈍くて助かったわ」

空から月の柔らかな光が注がれているため、歩くには不自由しない。時刻はもうすぐ午後十一時半。いいとこのお嬢様が出歩くには不自然な時間帯であるにもかかわらず、アメリカは歩みを止めない。後ろで高く括られた黒い長髪が歩みに合わせて左右に揺れる。

今の彼女は、真つ黒で体のラインがわかるくらいぴったりとした衣装を身に纏っている。ともすれば闇に紛れてしまいそうな、そしてとても動きやすそうな服だ。それだけでも十分異彩を放っていたが、彼女の顔の上半分を多う真つ赤な仮面がさらにその姿を奇天烈にしていた。

アメリカは暗く狭い路地から幾分か広い道に出た。まばらだが、人通りもある。しかし、人々は皆、アメリカが見えていないかのように彼女の脇を通り抜けていった。それを確認してアメリカの桜色の唇がゆったりと弧を描く。

「今日も仮面^{マスク}は絶好調みたいね」

こっそりとつぶやいて、アメリカは目元の仮面の位置を直した。この仮面のおかげでアメリカは周りに視認されなくすることが出来る。つまり、一時的に透明人間になれるのだ。今まで怪盗シンデレラが誰にも姿を見られることがなかったのは、このため。ついでのこの仮面、夜目を効くようにもしてくれるスグレモノである。

少々狡がすぎるのではないかとアメリカは思っただが、これがなければおそらく彼女は怪盗という職業を全うできなかっただろう。

ほどなくしてアメリカは大きな屋敷の前で足を止めた。今回の獲^{ゲット}物が待つ屋敷。他人から見えないのをいいことに自分の身体能力に

物を言わせ、堂々と扉をよじ登る。

侵入用の秘密道具も持ち合わせていないではなかったが、それらの道具を使うことをアメリカは好まなかった。どれも反則じみた道具ばかりで、狡をしている気がしてならないのだ。だからアメリカはピンチになったとき以外は仮面以外の道具を使わないようにしていた。

「まったく、噂の怪盗シンデレラがこんな方法で侵入してるなんて世の人が知ったらどう思うかし、らっ」

ひと思いに扉から飛び降りる。着地の反動で足がしびれたが、気にせず一歩踏み出した。どうやら飛び降りた先は花壇だったようで、アメリカの周りには花弁を閉じた花々が生い茂っていた。

「ごめんなさいね。ちよっとお邪魔するわよ」

——グルルル……

突然聞こえた不穏な唸り声に、瞬時に体を強張らせた。ぎこちなく首を回して音の発生源を見やる。アメリカから五メートルもない位置に凶悪そうなドーベルマンが牙を剥きだして威嚇していた。

「やば、匂い……」

仮面は姿は消せても、匂いまでは消してくれない。

アメリカは腹を括って、ドーベルマンたちと対峙した。

人間の、しかも少女の脚力ごときではドーベルマンを撒くことはできないだろう。

「お願いだから、うまくいつてよ……」

——か八かの賭だ。

アメリカは左手の親指と人差し指とで輪を作り、口元にあてがつた。その輪にふうつと静かに吐息をくぐらせる。

「そこをどいてちょうだい。私は敵じゃないわ」

輪を通して放たれた彼女の言葉は、摩訶不思議の力を含んで相手に届く。その言葉の力にとらわれたなら、相手は彼女の言葉を受け入れざるを得なくなる。——うまくいったなら。

威嚇をやめないドーベルマンたちをみて、アメリカは焦った。こ

の呪い^{まじな}が効かないとなると、アメリカはちょっと情けないことになるだろう。

「お願いよ……！ あなた達に危害を加えたくないの」

もう一度、願いを込めて言葉を発する。

すると、一匹、また一匹とむき出しにしていた歯を収めはじめた。くうーんと悲しげに鳴くと、次々にアメリカに背を向けていく。

「よかった。いい子たちね」

ほっと胸をなで下ろし、アメリカは屋敷の玄関へと急いだ。この調子だと、中にもいろいろトラップが仕掛けられているかもしれない。急がなければ、もう時間がなかった。刻限は真夜中の十二時。^{ターゲット}それまでに獲物を持ち帰らなければいけない。

十二時を過ぎたシンデレラは灰かぶりに戻ってしまう。

改造したヘアピンを使って扉の鍵を開けると、中はしんと静まりかえっていた。

今回狙うお宝は、情報によれば屋敷の二階奥の部屋にあるという。庭にも廊下にも警察がいないことを妙に思ったが、焦っていたアメリカはそのまま部屋へと向かった。

部屋の扉は大きく、細かな彫刻が施されていた。その扉を極力静かにゆっくり開け、隙間から身を滑り込ませる。中には、やはり人の影はなかった。部屋の中央に盗んでくださいとばかりに大粒のダイヤが埋め込まれた指輪が飾られている。

アメリカは吸い寄せられるように指輪のほうへ近づこうとしたが、たどりと着く前に何かに足を取られる。

「ふぎやつ」

無様に顔面を床に打ち付けたアメリカ。どうやら張られた糸に躓いたらしい。

けたたましい音が屋敷中に響く。侵入者を知らせる警報機だ。糸が切れると鳴るように仕掛けられていたようだ。

チツと、小さく舌打ちをする。焦っていたとはいえ、こんな些細な罠を見落とすとは。

部屋の外がざわつくのが聞こえた。

アメリアはすばやく立ち上がると指輪をつかみ、かわりにカードを残して窓辺へと走った。

窓へと手をかけたとき、ぼーん、というぐもった音が聞こえた。時計の音。十二時になってしまったのだ。

ついで部屋の扉も勢いよく開く。

テラスへと出ていたアメリアは欄干をつかみ、一思いに飛び降りた。危なげなく着地する。

きつともう、警察に彼女の姿は見えているだろう。それでもつかまるわけにはいかないと、彼女はひたすら塀まで走った。

背後から制止の声やシンデレラの名を呼ぶ声が聞こえる。

王子様ではない警察には興味なんてない。

アメリアは女子にはあるまじき脚力で踏み切ると、一息に塀の上へと飛び上がる。そして驚きの声を残し、塀の向こう側へと姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2699v/>

月夜の魔法 — Cinderella the phantom thief —

2011年7月28日03時11分発行